近藤孝弘 編著
東アジアの歴史政策
——日中韓 対話と歴史認識
〈明石書店、二〇〇八年八月、二八九頁〉

今世紀初頭に始まった、中国社会科学院辺境史地研究センターの国家プロジェクト「東北工程」が、渤海・高句麗などを中国の地方政権・少数民族政権と位置付けたため、韓国の批判を受けて国際問題化したこと(第二章)は記憶に新しい。日本でも日中戦争での侵略を指摘されると、「元寇があったではないか」との「歴史観」を振りかざして中国を非難する者が時折見られる。いずれにせよ、現在の「国境」や「国家」の枠組みそのままで過去の歴史を見ようとする非歴史的な議論である。

国民国家群が構成する現代の世界では、ナショナルヒストリーが創作されがちである。そこでは自国の由来を、程度の差こそあれ現在の正当化のため、正統性の保障のために都合のよい歴史像として子供たちに刷り込んでいく。戦火を交えたり、支配と従属の関係の歴史があれば、当時の歴史的環境がいかなるものであれ、また現在の関係がどうであれ、デフォルメが生じやすい。

本書は、日本・中国・韓国三国の歴史研究者による共同研究であり、名古屋大学のプロジェクト「東アジアにおける国際協調的歴史教育システムの構築に関する政治教育的研究」の成果論文集である。その目的は「東アジアの歴史問題を捉えるための明確な枠組みを提示すること」で、日中韓三国が「協力してそれに取り組む可能性をひら」き、各国政府が支援する歴史共同研究や民間での歴史共通教材作成の動きを背景に、「新たな目標設定を支援する現実的課題」に応えようとする立場に立つと述べる。全体は三部からなり、韓国・中国・日本の順に、それぞれの地域を研究対象、あるいは出身とする歴史研究者の論考を四本ずつ収録している。総じて真摯な議論が展開され、相互理解のための議論の場を形成する重要性が主張されている。例えば、楊彪は東アジア地域の発展を支える「共通の価値」の追求を主張し(第六章)、劉傑は「知の共同空間」が日中間に構築される前提がすでに存在していると主張する(第九章)。しかし、現実には、「東北工程」以前の一九九三年の国際シンポでも高句麗を中国史の不可欠の一部とする中国の議論に北朝鮮の学者が直接批判を行ったこと(第二章)、歴史問題への充分な対応ができないのはバルカン諸国や中東も同様であるとの指摘(第十二章)は、問題の根深さを提示してもいる。

とまれ、本書は近年の『歴史教科書をめぐる日韓対話』(大月書店)や『国境を越える歴史認識』(東京大学出版会)などとの併読を勧めたい。しかし、『世界史をどう教えるか』(山川出版社)など、歴史教育の現場からの研究報告を踏まえた議論が不可欠であろう。なぜなら、実際にナショナルヒストリーを刷り込まれるのは初等中等教育段階であり、大学段階ではもう遅いのであるから。

(三好 章)